

先ごろ沖縄のSさんと仰る同じ年の方から戦時随想集を送っていただいた。終戦時東京からさほど遠くない田舎町に疎開していた私とは違って、Sさんは戦中戦後を通して心身ともに厳しい生活を強いられた。マリアナ諸島の激戦の島・テニアン島で終戦を迎えた時、遙か沖合から米軍海兵隊が上陸用舟艇でビーチへ上陸した時の恐ろしかった記憶が心に焼き付いて離れないという。父親は戦死し、妹は栄養失調で亡くなり、米軍占領下に過酷な生活を送って、一度は自決を覚悟した母と弟ともども着の身着のまま母の故郷沖縄へ引き上げ、ここでもまた米軍の支配下で厳しい青少年期を過ごしたという。

そのテニアン島は今ではアメリカの自治領となり、同じミクロネシアの島々からも取り残されてしまった。日本統治時代には1万5千人もの日本人が生活し島は賑わっていたが、今では衰退し島民は3千人足らずにまで減ってしまった。観光資源にも恵まれず、日本か

らの直行便もなく日本人観光客もほとんど訪れない陽の当たらない小さな島である。

しかし、そこには日本人が決して忘れてはならない、広島長崎へ原爆を投下したあのB29戦略爆撃機「エノラ・ゲイ」と「ボックスカー」が飛び立った空港がそのまま残され、滑走路端に建てられた記念碑が過去の記録をさりげなく伝えてくれる。

かつて太平洋戦争戦没者遺骨収集事業に携わっていた時、プロペラ機でサイパン島からテニアンへ飛び、そこで集められた遺骨とともに上陸用舟艇でサイパンへ帰島したことがあった。映画などでは、第2次世界大戦中連合軍の上陸用舟艇がノルマンジー海岸へ上陸し、その先端部が大きく開くと中から兵士たちがどっと飛び出す勇ましいシーンが映し出されるが、外が見えない狭苦しい船底で戦没者の遺骨とともに身を屈めて乗船していた時は、気持ちが落ち込んでいた。私とは状況は異なるが、Sさんの過酷な戦時体験にも心の襲に似たような感情がこびりつき、悪夢から逃げ出したい気持ちがあったのではないだろうか。 エッセイスト 近藤 節夫